

編集室

* 2012年総合大会が岡山大学津島キャンパスで、3月20日から23日の4日間にわたり開催された。今年の東京は春の訪れが遅く、彼岸になっても冬の名残の寒さが抜けなかったが、岡山はのどかな春の陽光に包まれ、誠に穏やかなものであった。

* ここ数年間、大会初日に、編集委員、査読委員に対する説明会が実施されている。その例にならい、本大会でも3月20日に実施された。学会の評価の大きな割合を占める学会論文誌であるが、その学会論文誌の質を決める当事者は、著者はもちろんであるが、実質的に編集委員、査読委員によるところが大きい。そのため、編集委員、査読委員に編集方針を説明する説明会は、大変重要な役割を果たす。また、学会を巡る環境も、海外からの投稿数の増加や国内会員の減少、インパクトファクター等の客観尺度による論文誌の外部評価などにより、大きく変わりつつある。

* 説明会では、今井編集理事から、迅速な査読や、欠点を指摘するのに熱心な余り魅力ある論文を不採録にすることのないような心がけなどの大方針が示された。続いて、基礎・境界ソサイエティ英文論文誌の牧野編集委員長から、基礎・境界ソサイエティを例に、実際の論文誌査読に関わる手順や注意点が述べられた。その後、通信ソサイエティ英文論文誌の山本編集委員長、エレクトロニクスソサイエティ和文論文誌の松尾編集委員長、情報・システムソサイエティ和文論文誌の杉本編集委員長、ELEX岩本編集幹事から、各ソサイエティの論文誌に関わる査読基準の説明が、基礎・境界ソサイエティとの差分という形で紹介された。その後の質疑応答を経て、今回の説明会も無事終了した。編集幹事団に加え、編集委員、査読委員の皆様には、日頃の稼働に加え、説明会にも多数御参加頂き頭の下がる思いである。

* さて、本会論文誌を取り巻く外部環境の中でも、海外からの投稿数の増加は、編集の実務にも大きな影響を及ぼし始めている。ELEXでは大半が、通信ソサイエティ英文論文誌でも過半が、海外からの投稿となっているのに対して、査読委員、編集委員、編集幹事団は、ほとんどが日本人であ

る。結果的に、日本人ボランティアの方々に多大な負担をかけながら、海外からはグローバル化が不十分という苦言が呈せられる。より多くの海外の方々に査読委員、編集委員、編集幹事団になって頂く必要があるが、実態的にはなかなか進まない。

* 編集のグローバル化については、23日に実施された海外セクション代表者会議においても指摘された。同会議には、インドネシア、タイ、韓国、中国、台湾などのアジア各国・地域とヨーロッパの各セクション代表者が出席した。一般に、セクション代表者のみならず、海外の本会関係者は、キャリアアップの道具として学会の役職を経験するという意識が高く、積極的である。一方、日本人は、非常にまじめに学会の職務も遂行するが、必ずしも積極的に学会の役職に就くわけではなく、順番だからなどの消極的理由で役職を務めるケースが多いと思う。この点、海外の研究者の態度とは好対照である。編集委員等についても、海外からは自薦が多いとも聞く。にもかかわらず、必ずしも海外からの編集委員等が増えないのには、当該候補者についての情報が不十分で、責任を持って任に当たって頂けるか不安が残るため、指名しづらい等の理由があるらしい（論文誌によっても事情は異なるだろう）。負担が大きくなり日本人にも不満が生じ、やる気があってもやれないことで外国の方にも不満が残る、この状態は何とか解消せねばならない。

* 最終的には、編集理事も海外から選出されるようになるべきであろう。編集理事は、理事会、担務連絡会、編集連絡会、会誌編集委員会、著作権管理委員会など、非常に負担が大きく、またこれらは、現状では全て直接会議開催場所（東京）に来なければならない。そのため、現状では海外どころか、東京以外の勤務地の方に編集理事をお願いすることも現実的には困難である。また、拘束時間も長く、職場の理解がなければとても務まるものではない。そろそろこの現状を打破するため、テレビ会議、電話会議の活用によるシステムの対応や、権限委譲等による制度的な対応が必要と思える。

(編集理事 斎藤 洋)